



300号記念特集・先生のエッセー 情報過多の時代？

足本憲治

関連情報や、活動履歴に基づいたオススメが次々にスマホへ表示される現代。最近の学生は偶然の出会いに乏しい、加工された情報にばかり接し荒々しい生の情報に疎い、などと言われます。確かに、かつて図書館の索引カードをめくって起きてきた「全く関連しない情報」とのデタラメな出会いのような、いわば「ノイズ」との縁が減少傾向にあるなら少し寂しい気はします。

ただ、私だって道端の雑草ばかり食べて大きくなったわけでもなく、壁に貼ってあった「謎の図書館員オジンスキー氏による関連情報」やParlandoの「私のおすすめ」のような、誰かのちょっとした導きによって自身の世界が広がったこともまた大いにあるわけで…、オススメの質や場を巡る思いは尽きることはありません。

教員が学生に「教える」なんて幻想だ。出来る事はせいぜい良書を紹介することくらいだ。といった言説をかつて耳にした折、「確かにそんなものかなあ、反発している方々は怒りすぎ？」などと、ずいぶん生意気な感想を持ちました。が、その私が今や教員として、ある方向への矯正でも、一方的に何かを与えるだけでもない「導く」ことの難しさに、日々身悶えしています。

あしもと けんじ ●本学准教授(音楽理論)

十数年前のある日、妻が「失敗した…」と言いつつ帰宅しました。訳を訊けば、次のようなこと。

帰宅中の路線バス車内。誰かが手すりを盛んに叩いている。打楽器奏者の彼女には分かるそのキレッキレのリズムの凄み。「一体どんな人が？」と振り返れば、奏者は知的障害者らしき男の子で、その横では母親と思しき女性がそれを制止しつつ周囲に何度も何度も謝っている。「うちの子がうるさくてすみません…」。

我が妻の後悔は、「公衆マナーのことはさておき、あのお母さんが息子の天才性を理解していたかは疑問。彼に「君、カッコいいね。」と一言伝えればよかった。言わずに降りてしまった。」というもの。伝えていたらその子、あるいはその親子に何か新しい世界が開けたでしょうか。

本人も気づいていない「何か」を見つけ、ソツと教えてあげること。そして導くこと。私がそんな教員になれるとしたら、図書館の力が絶対に必要。そう思います。

300号記念特集・先生のエッセー 「ぱるらんど万歳！」

江澤聖子

「ぱるらんど」第300号刊行、おめでとうございます。「ぱるらんど」は毎回読むたびに、心をこめて作成して下さる図書館の方々の細やかな気配り、愛情や思いを強く感じています。すっきりと整理された内容は勿論のこと、紙質やレイアウトにこだわりながらこんなに丁寧に読みやすく、また親しみやすいものを作って下さる図書館は他にはないでしょう。個人的には新しい装丁になってからの表紙の絵の暖かみがとても好きで、癒しとしていつもバッグの中に入れておきたくなります。「館長室から」は、前図書館長の佐藤真一先生の時代からのファンで、今でも真っ先に読んでいます。学生からの「私のおすすめ」も、音楽に純粋に感動する瑞々しい感性が伝わってきて、このような学生達を育てていくことに喜びを感じています。

私の学生時代は、授業が休講になったり少しでも時間があると、すぐに図書館に行くのが常でした。静かな空間でお目当ての本を読んだり、新たな発見を探して、好奇心、期待感と共に録音目録をめくるひと時が何より好きでした。

高校生になったばかりの頃、「F・リストの作品は男性にしか弾けないのでは？女性には無理？」と考えていた矢先に女流ピアニスト、フランス・クリダの演奏に出会って、鮮烈な印象を受けました。その後すぐさまリストの作品に取りかかり、練習に夢中になったことは言うまでもありません。また図書館で偶然見つけたレコードに魅了された歌手、フランシスコ・アライサとテオ・アダムが、留学先のベルリン歌劇場での公演に二人揃って出演していた時の驚きと感激！は今でも忘れられない思い出です。在学中に図書館で得られた知識と感動が、大学卒業後の音楽人生を更に豊かにしてくれたのです。

数年前から図書館委員を務めさせて頂いていることもあり、図書館主催の講座の企画に携わっています。昨年は「ベートーヴェンとエロイカ」と題して、交響曲と変奏曲を取り上げ、沼口隆先生とご一緒させて頂きました。今年は12月に、大正～昭和にかけて出版された「セノオ楽譜」についての興味深いお話と演奏を、声楽の小泉恵子先生、品田昭子先生、ヴァイオリンの青木高志先生と共にお届けしたいと計画していますので、是非皆様にお聴き頂きたいと思っております。

えざわ せいこ ●本学准教授(ピアノ)

300号記念特集・先生のエッセー 図書館とコミュニケーション

沼口隆

図書館は静かな場所である。そうあるべきでもある。この前提からすればコミュニケーションが盛んな場所というイメージは薄いかも知れない。しかし、図書館もまた、人と人が触れあう場所である。人の関わりが持つ意味は大きい。

留学中には、ドイツ国内の幾つもの図書館を利用した。館員は全般的に親切だが、それでもちょっとした対応の違いでビクビクしたり、ホッとしたりしたものだ。初めて訪ねた施設であれば、最初に対応してくれた人の印象が施設そのものの、少なくとも当座の印象を左右しかねない。

国立音楽大学の図書館を初めて訪れたのは、他大学で卒業論文を準備していた時のことだった。所属大学からの紹介状があって、当日利用証を作って貰ったのだが、受付の対応がとても親切・丁寧だったのが印象に残っている。本学との関わりが深まったのは、当時の音楽研究所にあった「ベートーヴェン研究部門」で研究員をさせて貰った時である。当時の研究所は、学外者向けのイベントを盛んに開催していたが、それに関連した図書館展示も行っていた。

パネルを作ったり、ディスプレイを決めたりする中で、面倒な作業を嫌な顔ひとつせず、に館員の方々が引き受けて下さっていた。改めて謝意を表したい。

事務職員の野崎詩織さんは、本学で音楽学を学んだ方で、当初は図書館に配属された。新人職員の挨拶の中で、学生時代の思い出として、館員が教えてくれた資料が修士論文において決定的な役割を担ったことを紹介している(『ぱるらんど』283号、p.8)。館員は通例は研究者ではないが、日々の経験から得た該博な知識と、何よりも利用者のことを考える気持ちが、間接的にはあっても、大きな研究成果へと実を結ぶことがある。そして『ぱるらんど』もまた、利用者への思いが込められた貴重なコミュニケーション・ツールである。

館員は減り、『ぱるらんど』は薄くなった。寂しいものだ。しかし、図書館スタッフの温かみは健在だ。この大きな強みを、これからも大切にしていって欲しい。

ぬまぐち たかし ●本学准教授(音楽学)

300号記念特集・先生のエッセー

古の掛橋

福井敬

私の腕時計は、以前、父から譲り受けた物で、4、50年前の物である。手巻き式で、リュースが二つあり、一つはやはり手巻き式のアラーム用である。

毎日ゼンマイを巻かないと止まってしまうが、その毎日の動作が何かよいのである。

他の腕時計もしたりするが、またこれに戻ってくる。

このように、ひとつのものを使い続ける気質は、クラシックの音楽を生業とする私にとっては、あるべき事なのかも知れない。

私たちは、作られて何百年と経た、一枚の楽譜を再現し続ける。時代や人でその表現の仕方は変わって行くかも知れないが、ひとつの作品を慈しみ、愛し続けるのではないか。

図書館という場所も、その時代の要請に従って、常に先進的な容器を装備しないとイケないが、根本は古(いにしえ)の楽譜であり、音源であり、書物でありを、全て人の慈しみのために準備してあるべき所なのだと思う。

そして『ぱるらんど』とは、私たちと図書館、言わば今と古を結ぶ掛橋なのであろう。

私は音楽も、図書館も、『ぱるらんど』も、ずっと慈しみ続けたいと思います。



ふくい けい ●本学教授(音楽)